

フィリピン調査外伝

社会調査で、現地で雇用した調査員（学生）と Pinamuk-an に同行した。会話は現地の言葉アクラン語だから、会話の内容は私にはわからない。所々通訳してもらおうと、何となくわかるところもある。面白かったのは、一人のおばさんで、放流事業に文句を言っていた。Pinamuk-an は細長い砂州で、彼女の住んでいるところは下流側だ。放流するのはもっと上流だから下流にはほとんど効果が及ばない。現に標識されたエビが漁獲されるのはごくわずかだと言った。実際に放流時に標識をするのはごく一部だ、0.1%もならない。ということは、標識エビが1尾捕まるということは、1000尾以上が漁獲されているということになる。下流でも、放流エビはしっかり漁獲されている。

そのおばさんの家から少し離れたいくつかの家が集まった集落の一番奥に、薄暗い小さな家があった。インタビューに応じてくれたのは母親とその息子だった。父親はいないらしい。死んでしまったのだろう。栄養状態のせいか、フィリピンの貧困層は小柄だ。20歳だと言ったその息子は、もっと幼く中学生ぐらいにしか見えない。比較的しっかりと答えている息子を母親がうれしそうに見ている。職業を聞いたら漁師だという。どんな漁業をしているのか訊いたら、小さなタモ網のようなものを取り出した。日本で子供の遊び用に売られている網とサイズとしては同じだ。素朴な漁業にしても、せめて刺し網か、籠、押し網ぐらいのことは言ってもらいたかった。被せ網という漁法だろう。夜、懐中電灯で照らして、底層の獲物に網をかぶせて取る。日本でも遊びでやる人はいる。そんなものは漁業ではないと言いたかった。しかし、それで母を養っているのだ。悲しいが立派な生業だ。息子の話を聞く母親は嬉しそうだった。その時、標識の付いた放流魚を捕まえたことがあると言った。そして、それを持って行って、SEFDEC/AQD から、お礼の記念品をもらったと言った。それは、謝礼用にと私がデザインした日本式の手ぬぐいだ。その手ぬぐいを持っていたので、思わず取り出して見せたくなくなったが、もちろんやめた。

とにかく、私はうれしかった。いや、うれしいのか悲しいのかわからなかった。そんな漁業とも言えない漁法で母を養おうとする少年。小さな小屋での母一人子一人の暮らし。そして、少年の漁師としての誇り。私たちは、彼らにいくばくかの収入の増加をもたらすことができた。それで満足というべきか。それでは足りないと考えべきなのか。お前たちのできることはせいぜいその程度だと言う人もいるだろう。しかし、その程度かもしれないが、現実にできることはできたのだ。そこから出発するしかない。